

ROSE ON JUNE 19

六月十九日の薔薇
ハァモニベル

HARMONYBELL

目次

《六月十九日の薔薇》.....	1
参考文献：.....	10

《六月十九日の薔薇》

誕生花が薔薇である今日きょうこのひ此日に、そう六月十九日に、あの人が生まれた。

6月19日生まれのアノ人といえば、そう天才のあの人のことだ。仏の哲学者で数学者で物理学者で……意外なことに実業家でもあった、かのブレーズ・パスカル（1623年）その人をまず挙げねばならない。幼少期からパスカルが天才だった理由は、間違いなく、学校へ行かなかったことだろう（彼は自宅のサロンで一流の文化人たちと交流しながら育った。私から見るとそれで天才にならない方がどうかしている）。「我考える故に我在り」で有名なデカルトもまた天才だったが、彼は理解のある校長のおかげで、朝は好きなだけ寝ていても良いと許されていたので、毎朝ゆったりベッドの中で好きなだけ思索に耽り、それが自分の知性を本物に育てた、と後に振り返っている。因みに私の祖父は直観力の鋭さ、飛びぬけた器用さ、織田信長のような激しい性格、と特色だらけでこれまで私が出遭ったどの人間より天才な印象が強い人だったが、口癖のように、「学校に行くとは馬鹿になるぞ」、と小さな私によく言っていた。幼心に、変わった人だな、と思っていたが、家の事情で学校へ行けなかった祖父は、パスカルもデカルトも知らなかったと思うけれど、世の中の真実は知っていたようだ。

ところで、パスカルというと、哲学や数学など抽象的な思考・思索のイメージが強いが、乗り合いバスのしくみを考案して実用化した実業家だったことは、あまり知られていない。当時、富裕層だけが利用できた馬車を、ひろく共有利用できるよう自ら創業したが、その半年後に逝ってしまったので、業績としては人々の記憶に薄いのだろう。

「人間は考える葦である」という、彼の遺稿『パンセ』のなかのこの言葉の方は、かつて、今も、これからも、宇宙と人類が存在していく限り、その記憶にずっと刻まれて残るだろうが。

彼の言うように、人は世界の一部にすぎないが、世界は人の思惟の一部にすぎない。これは、「世界」を社会や会社に置き換えても同じように言える。人は社会の一部にすぎないが、社会は人の思惟の一部にすぎない。人は会社のなかのごく一部にすぎないが、会社は人の思惟のなかのごく一部にすぎない。つまり、人は環境に飲み込まれて生きているが、環境を包み込めるのが真の知性である、という認識だ。

『パンセ（思索録）』には他にも、もう一つ有名な言葉がある。「クレオパトラの鼻」についての一節だ。これについては、『鼻』という短編で作家デビューした芥川龍之介が『侏儒の言葉』という随想に、そこでも「鼻」と題して一節を書いている。

（以下、引用—————開始／

鼻

クレオパトラの鼻が曲っていたとすれば、世界の歴史はその為に一変していたかも知れないとは名高いパスカルの警句である。しかし恋人と云うものは、滅多に実相を見るものではない。いや、我々の自己欺瞞は一たび恋愛に陥ったが最後、最も完全に行われるのである。アントニイもそう云う例に洩れず、クレオパトラの鼻が曲っていたとすれば、努めてそれを見まいとしたであろう。又見ずにはいられない場合もその短所を補うべき何か他の長所を探したであろう。

何か他の長所と云えば、天下に我々の恋人位、無数の長所を具なえた女性は一人もないのに相違ない。アントニイもきっと我々同様、クレオパトラの眼とか唇とかに、あり余る償いを見出したであろう。その上また、例の「彼女の心」！ 実際我々の愛する女性は、古往今来、飽き飽きする程、素ばらしい心の持ち主である。

（略）

こう云う我々の自己欺瞞はひとり恋愛に限ったことではない。

我々は多少の相違さえ除けば、大抵我々の欲するままに、いろいろ実相を塗り変えている。たとえば歯科医の看板にしても、それが我々の眼にはいるのは看板の存在そのものよりも、看板のあることを欲する心、——ひいては我々の歯痛ではないか？

もちろん我々の歯痛などは世界の歴史には没交渉であろう。しかしこう云う自己欺瞞は民心を知りたがる政治家にも、敵状を知りたがる軍人にも、或は又財況を知りたがる実業家にも同じようにきっと起るのである。わたしはこれを修正すべき理智の存在を否みはしない。

同時に又百般の人事を統べる「偶然」の存在も認めるものである。が、あらゆる熱情は理性の存在を忘れ易い。「偶然」は云わば神意である。すると我々の自己欺瞞は世界の歴史を左右すべき、最も永久な力かも知れない。

つまり二千余年の歴史は眇たる一クレオパトラの鼻の如何に依ったのではない。

むしろ地上に遍満した我々の愚昧に依ったのである。

晒すべき、——しかし壮嚴な我々の愚昧に依ったのである。

（以上、引用—————／終了）

芥川龍之介は、パスカルに反論して、そんなに人間は冷静に正確なものを見てはいない。むしろ、そこに在る一個の「鼻」の微細さではなく、それを見る多数の眼のほうが

どうしようも無いほど大きく歪んでいるからこそ、「晒すべき、しかし荘厳な」歴史が作られてきたのだ、と言っている。

*

6月19日に生まれた天才は、他にもまだいる。そう今度は日本人である。1600年代初頭などという江戸幕府が出来た頃の人ではなく、もっとずっと新しい1900年代生まれの日本人で、誰もが知っている人だ。

(以下、引用—————開始／

なんの用意も無しに原稿用紙にむかった。こういうのを本当の随筆というのかも知れない。きょうは、六月十九日である。晴天である。私の生れた日は明治四十二年の六月十九日である。私は子供の頃、妙にひがんで、自分を父母のほんとうの子でないと思い込んでいた事があった。兄弟中で自分ひとりだけがのけものにされているような気がしていた。

(以上、引用—————／終了)

「六月十九日」という題の「本当の随筆(?)」の冒頭をこう書いているのは、作家の太宰治(1902年)である。何となく家族のなかで浮いている(まあ言ってみれば「みにくいアヒルの子」のような)意識を抱えていた彼が、この後、じぶんの出生の謎を密かに探ってみたりするのだが、証人が皆こぞって生まれた時の詳しい証言を揃えてしまうものだから、「なんだか、がっかりし」「自分の平凡な身の上が不満であった。」と続く、ごく短い雑文である。

太宰治も誕生日がパスカルと同じであるが、太宰は、人間を「考える葦」とは言わないだろうと思う。実際、『もの思う葦』という題の随想集があり(これは芥川のような面白さはない)、「考える」でなく「もの思う」としている。しかし、太宰治であれば、『人間は、人間をやめられないまま、人間になろうなろうとする程、どうしてもなれない葦である』と言うのではないか、という感じが私にはする。もっともあくまでも私見であるけれど。

ついでに書くと、太宰治も、芥川龍之介も、ともに文学入門の最たる作家という感じが私にはするが、それぞれ数ある作品のなかで私が特に好きなのは、芥川龍之介だと『蜜柑』という短編である。丁度これに対応する作品として太宰には『眉山』という短編

があり、芥川の『蜜柑』と、太宰の『眉山』を読み比べると、ふたりの個性の違いと、文学作家としての共通の温かい眼線を感じ取れると思う。この短編二作だけで、十分な文学入門になる。

芥川の眼は人や社会を外から眺めるところに本領があるので『蜜柑』が名作になる。こういう外から視るスタイルの作品では芥川の方に分がある。一方で、太宰の場合は、内側から発露して語るのが本領なので、太宰の作品だと私が特に好きなのは『燈籠』という短編である。

乾いた知性と、湿った情操という違いはあっても、二人とも共通して人間についてこう言うのではないか、と私は思ったりする。

《人間とは、内側に何らかの真実を抱えた外側である。》と。もっともあくまでも私見であるけれど。

こうした文学のちょっとした話をしたわけは、次に出てくる「あの人」と関係がある。人間が抱える内面の真実への理解と感受性が、役を演ずるときの演技の基底になるからだ。つまり、文学的な視力がその演技の質になって表れるから。だからちょっとそこを掘り下げて触れてみた。

それにしても、天才について「天才」という凡人が作った言葉の檻に閉じ込めると、天才が抱える内面の真実が見えなくなってしまう。それは、当の天才本人にすら、人生を通じて襲い掛かる悩みになる。すなわち、《一体、自分って何?》という大なる悩みである。

この点は、先に引用した「六月十九日」という太宰治の随筆にも、ちらりと出てきた。周囲とは違う自分、醜いアヒルの子の悩みだ。

この問題については、私は次のように考えている。

*

世の中は、凡人が8割である。ちょっと毛色が違うなというのは、良い方も、悪い方も少数で、合わせて2割であろう。小学校の教室を思い出せば解ると思う。一クラスに美人が存在する比率も丁度同じような感じだ。私は、小学校を幾つか転校したので、どこも似たようだ、という実感を持っているが、どうだろうか。

8割が凡人なので、凡人を基準にして世の中は動いていく。そして凡人のなかのスナリとその基準を充たせる順調で整った人が少数いて、エリートになり、大半のちょっと崩れた、基準をうまく充たせない多くの凡人を仕切るようになる。それでも、ちょっと崩れた凡人たちは、何とか、崩れながらも、その凡人の基準に則って、死んだような顔をしながらでも我慢して適応していきける。

しかし、凡人でない者には、その檻は不合理だし窮屈で耐えられない。そこで、檻の下の方からはみ出すのが、犯罪者や変人（一歩進むと狂人）であり、檻の上からはみ出すのが、凡人からは「天才」と呼ばれる人たち（私はこれを、偉人と奇人と呼ぶ。偉人の一歩手前の蛹が奇人）である。

つまり、社会は、《偉人・奇人・・・凡人の上と並・・・変人・狂人》という分布になっていて、凡人が一大メジャー勢力なので、凡人の^{じょう}上に合わせた基準が正統とされるから、そこでは奇人と変人はどうしても遠慮・委縮させられるのだ。

奇人は〈その基準〉が正統と言うにはまだまだ十分に練られていないと感じるから、基準に違和感を覚える。変人は〈その基準〉をみて自分自身を不十分だと感じるから自分を憎むか、基準を憎む。しかしいずれも（奇人も変人も）自分たちは少数派だから多数派の凡人たちに遠慮するし、現実には君臨している**凡人の上**に委縮させられる。

凡人サイドは、奇人も変人も同じように見えて区別がつかない。特に奇人を冷遇するようだ。成果の出た奇人は、仕方ないので天才として祭り上げて凡人のコンプレックスを紛らすが、その分、奇人には辛く当たるのかも知れない（笑）。内実は偉人と変わらない奇人であっても、凡人の視力・眼力では区別がつかないので、一緒くたに変人扱いする。それでこそ凡人、というか、だからこそ凡人なのだが、それが世の中の8割を占めているのだから、まだ、幼くて、自身が何者か解らずにいて、当然まだ偉人（白鳥）となっていない奇人（醜いアヒルの子）は、自分は変人なのだろうか、と悩み、**凡人の上**（＝上と並の「じょう」）に憧れるのである。

ただ、運命というか宿命は、偉人に平凡な凡人のような人生の歩みを全然許してくれない。何かの刑罰だろうか、と思うほど過酷で重いものを背負わせる。だから、決して、奇人をやめて凡人になる、というような器用な選択は出来ない。その苦悩の果てに、偉人が生まれる。

だが、そうなる前の永いながい生活の時間のなかで凡人達からの”仲間になれ”という社会的勧誘は凄まじい。そしてそうやって中途半端な迷いと煩悶のなかで揺れて居る限り、ついに偉人になることはないだろう、と思う。

《凡人失格》を残念がり嘆くあまり、変人に合格してしまうのもどうかと思うので、堂々と偉人になればいい、と私は思う。

凡人でもなく、変人でもないなら、孤独な白鳥となるしかないのだから。誰からも理解も称賛もされぬまま、奇人のまま行き倒れることは覚悟して、堂々と非凡人として凡人と向き合い付き合いながら、自己を貫いていくしかない。

しかし、その一方で実は、白鳥には白鳥が解るのだ。白鳥だけが、白鳥がまだヒナであっても、つまり、偉人は、奇人が変人とはまったく異質な、自分と同質の存在だと感じることができるのである。私はそんな風に、何となくだが、思っている。

東洋の占星学では、凡人を「内格」、偉人を「外格」という。そして崩れた内格と崩れた外格を「破格」という。そして、この破格と外格の識別鑑定は難しい。

世の中のあちこちに分布し蔓延る破格の人々により、世の中は揺さぶられる。社会は外格によって前進するが、破格によって停滞する。しかし、世の中は、破格と外格の区別がつかない。それで、徐々に停滞しながら歪んでいくのである。

なぜ区別がつかないか、フシギだが、先に引用した芥川龍之介の歴史観がその一つの

説明であろうか。

真の「考える輩」は1割のみで、それとは別にもう1割の〈他人を迷惑に巻き込んで自分で考えるべきことを他人に考えさせてくる輩〉が居り、さらに、それら二者の区別がつかない大勢の、物を歪めて見る8割もの〈錯覚する輩〉たち。

ただ、真の外格は、魂の純粋度が違う。だから、外格には外格が分かるのだ。

因みに、外格がなかなか結婚できないのも、8割もいる内格とは一緒になれないからだ。内格同士、外格同士でないと、うまく幸福になれない。

世の大半は凡人だから、内格の並は沢山いるので、内格の並どうしは結婚相手に困らないかと言うと、そうもいかない所があって、内格の並は、上のように整っていないので、欠損を抱えている。そこをうまく埋め合える相手がベストなのだが、ゴツ煮のように沢山いるので、適切な相手を見つける前に歪なカップルを作りやすいのだ。8割の内格たちは、沢山いる相手と無駄なドラマを繰り返したり、結合に失敗したりしやすくなるから別の哀しさがある。

外格は、そもそも希少なので、なかなか運命の外格が見あたらない、という事になる。成功者同士がいいわけでも無く、外格の場合は、相手を間違えると、一気に破格に急降下してしまう。反対に無名同士でも外格は整合する外格に出逢えば持っている力を存分に発揮することができるようになり一変する。でも、そもそもなかなか出逢えない。それに、本人の内側でも外側でも凡人の常識が邪魔をして余程の器がある者同士でないと一緒になれない。

思っている以上に、相性というのは難しいものなのである。

社会の常識に従えば、人々がみんな幸福になるわけではないのは、以上のような内訳による。社会通念は、凡人の上の為にある基準だからだ。しかし大半の人は、内格の並か破格の上である。だから、内格の上の親が、そうでない子供に通念を押し付けると子供は不幸になる。親が破格だと整った子供は塗炭の苦しみの中で育つ。上司と部下でも同じだ。この《格》のズレが世の中の多くの不幸の種である。

内格が作っている通念の檻が苦しいからと言って、その外にうっかり出ると、今度は、そこに、劣悪に荒んだ破格の亡者と鬼が、友のような顔をして待っている。

…結局、世界に、真の外格の居場所は無く孤独であり孤高になる。しかし、破格や内格の苦悩を取り去ることができるのは、そんな真の外格の聖者だけなのだが……。

*

さて、話を戻そう。誕生日が共通する二人の人物をたまたま並べてみたのであった。でもパスカルと太宰が同じ誕生日だからと言って、それだけで同じような性格だったり運命だったりするわけでは勿論ない。それについても、ついでにちょっと考えてみたい。

生年月日が、年も含めて全く同じ場合には、確かにある共通性が見られる。でも、そ

れですら「同じ」だとは言えない。その度合いとコントラストは双子を考えてみればわかるだろう。

私の経験では、学生時代、私と全く同じ生年月日の友人がいたので、ふたりが妙に一致している処と、正反対の処がある不思議というのが実感でわかる。彼は風貌が私とは正反対で、私は色白の都会の美少年だったが、彼はワイルドな色黒の野獣だった。私は、美術と国語の成績がずば抜けていたが、彼は、音楽と数学がずば抜けていた（単に得意だったのではなく、圧倒的にずば抜けていたその度合いが共通しているのがフシギで面白い）。私は弁が立つ方だったが、彼は常にもごもごと口下手であった。

他方、妙に共通していたのは、彼の家で電話したとき出てきた家族の性格がわたしの家族にそっくりだったことと、私は意志を曲げないという点では、まず他人に負けることはないのだが、ある時、彼が断固NOと言っているのを私が説得しなくてはならない役割になったことがあり、はじめて祖父以外で、ダイヤのように意志の固い他人に遭遇する経験をした（笑）。延々と話し合っただけの私も最後「わかった」と相手の意志を認めた。が、向こうも同時に「わかった」と私の意向を汲んだ（笑）。宇宙の果てまで行き着いてとうとう同時に負けて同時に勝ったのであった。結果、説得には成功したが、実質上は引き分けだった。ただその時以来、お互い相手に強い信頼感を持つことになった。意志の強さというのが信頼の基盤になるものなんだな、と感銘を受けた。自分に匹敵する相手でない、こういう感じ、や関係にはなりえない。

面白い事にわたしの母にも、近所に同じ生年月日の女性が幼馴染で居たそうだ。風貌は正反対で、性格も正反対だったという。その後、ふたりとも結婚し家庭を持ったわけだが、同窓会で再会したら、結婚生活や家庭が母とその人は真反対であった。違うのではなく、丁度、正反対である、というコントラストが興味深い。同じ生年月日だと、部分的に、全く同じか、正反対である、という不思議がある。母の場合は、その人が大嫌いなので、それもまた興味深い（笑）。そうは生きなかったがそうも生きられたという自分の人生の答えを見せてくれる相手といえるかも知れない。

というわけで、生年月日まで一緒だと妙な関連があるのだが、それでも何もかも、又は、やたらと一致する点が多いわけではない。だから、（生まれた月日のみ一致するだけの）誕生日だけが一緒でも、ひとつに並べて括ることはできない。年がズレるだけで共通性はずっと希薄になり、ほぼ無関係だと言う感じになる。ところが、面白い事に、全く異人種か、というと、そうとも言えない、何となく感性が似くさっているところが無くもないのかも知れない、という私自身のとても奇妙な感懐がある。実に奇妙な。

私は、4月13日生まれなのだが、これが、実在の人物ではない人物と同じ誕生日だったので、偶然にしても面白いなどと思って、その彼の性格が私と似ているか観察してみると、面白いことに何となく性質がよく似ているのだ（笑）。これは、とても不思議な気がした。イアン・フレミングの作中人物（主人公）で映画でも有名だが、かの007、ジェームズボンドと誕生日が同じなのだ（無論、ボンドの方がかなり年上）。私は、美女に好かれる方だが、ああしたプレイボーイではないのでその点正反対だが、007が芯の部分で自分と似ているなど感じるのは、決死の場面でかならず愛する女の人を助け

に行くところだ。ボンドにはトラウマがあって、たとえ死んでもそうしないでおれない設定になっているのだが、それは誰でもが持っているわけではない掛け値なしの愛なのだ。ごく自然なこととして、何の躊躇いもなくボンドはそうするのだろうと思う。私ならそうするからだ。愛する人が死んでしまうのなら、自分もべつにこの世に未練はないと感じるからだ。愛する人以上に価値のあるものなど、この世界には無いからである。

そういう所は、私に特有な変わったところだとじぶんで認識しているので、共通する魂を見つけることなど無くて当然だと思っているところなのだが、あのボンド特有の行為が、わたしには、何の違和感もなくごく自然な、同じ魂の一致と感じられるのだ。

*

生年月日や、誕生日というのは、不思議なものだ。人間というのがそれだけ不思議なものだからだろう。魂の繋がりとか、相性というものも、すごく不思議だ。

*

・・・(以下、略)・・・

誕生日おめでとう！愛をこめて

この本を贈ります（2021.06.19）ハァモニィベル



image 0 0 4 .jpg

参考文献：

■＜文中で触れた作品＞

『蜜柑』 芥川龍之介

URL_PLACEHOLDER_&id=43017

『眉山』 太宰治

URL_PLACEHOLDER_&id=243

『灯籠』 太宰治

URL_PLACEHOLDER_&id=1568

六月十九日の薔薇

著 ハァモニィベル

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
